



いつ投入されてもいいように、真剣なまなざしでゲームの展開を見据える石谷選手。出場後は持ち前のスピードで相手をほんろうした。

© Rizing-Fukuoka y.sasaki/bj-league



盛大な観客の声援を背に、最後まで健闘するが90対101で無念の敗北。参入6シーズン目での初優勝を逃した。(写真=© Rizing-Fukuoka y.sasaki/bj-league)

「日本一」をかけた最終戦」

バスケット界の「聖地」で

躍動するホープ

bjリーグ参入6年目のライジング福岡が、初めて掴んだ頂上決戦。その歩みには、チームの成長とともに進化し続ける男の姿が――。



© Rizing-Fukuoka y.sasaki/bj-league



SATOSHI ISHITANI

S60年6月19日生まれ(28)。伊方小学校、方城中学校を卒業後、中村学園三陽高等学校、福岡大学へと進学。2008年にプロバスケットボールチーム・ライジング福岡に入団、22歳でプロデビュー。背番号24、ポジションはポイントガード。身長177cm、体重73kg。



西地区を初めて制覇 憧れの夢舞台に立つ

プロ野球で言う日本シリーズの最終戦：東西リーグを勝ち抜き、さらに上位6チームずつによるプレーオフを制した2チームのみが踏み入る。聖地――それがbjリーグファイナルだ。日本のバスケットボールプレーヤーなら一度は夢見るであろうこの憧れの舞台に、福智のホープ・石谷聡選手が初めて挑んだ。

5月19日、決戦開催地の東京・有明コロシアムには白熱必至の晴れ舞台を一目見ようと、約1万人の観客が来場。石谷選手は「bjリーグでプレーしている以上は、当然ここが夢

故郷の声援を背負い 来季での雪辱を誓う

「シーズン中は家族をはじめ、福智町の友人や同級生からたくさん声援をいただいた。それが私の力になり、チームにも貢献できた」と故郷へ想いを馳せる石谷選手。「私の人生とバスケットボールプレーヤーへの歩みは福智町から始まった。ここまで成長できたことに感謝し、結果とプレーで恩返ししたい」と語り、目を細めた。

ファイナルでは2得点のみだったが、味方を生かすプレーでゲームメイクし、堅実な守備で相手のチャンスを幾度も奪って輝きを放った。試合が終わってみると、勝つ方法が幾通りもあったと分かり、悔やんでいる。しかし、この日の「負け」が優勝への道のりに必ずつながる」と石谷選手は力を込めて語る。

悔しさをバネに、故郷への想いを力に変えて進化し続ける石谷選手。チャンピオンの証しを掲げ、胸を張って凱旋する日は、そう遠い未来ではないはずだ。

を叶えるための目標地点。達成感とともに期待が膨らんだ」と試合前の心境を振り返る。

対戦相手・横浜とは今シーズン2度対戦し、2勝0敗の好相性。チームでは「特別なことをする必要はない。自分たちのいつものプレーをすれば勝てる」をテーマに、ファイナルに臨んだ。前半は攻撃力に定評のある福岡が4点リードで折り返すも、流れは悪かった。

今シーズン日本人最高得点を更新した横浜の蒲谷選手に、前半だけで23得点を許すなど、シーズン中に磨き抜いてきた守備がうまく機能していなかったのだ。途中出場ながら勝敗の流れを左右する重要

な場面で投入された石谷選手は、「最初からマークしていた選手だったのに、勢いを止める事ができなかった」と試合を振り返り、肩を落とす。第3クォーターに逆転を許すと、再び流れを引き戻すことはできず、試合終了を告げるブザーが鳴った。

優勝を称える紙吹雪が舞い、歓喜の声を上げる横浜の選手を見た石谷選手は「レギュラーシーズンで負けていない相手だったのに……優勝での勝利の難しさを痛感しました」と悔しさをにじませたが、「来年はチームメイトと一緒にあの場に立ちたい」と語り、目の輝きを失うことはなかった。